

モーパッサン、有島幸子と三遊亭円朝

——『名人長二』論——

宮 信 明

はじめに

一八五四〔安政元〕年一月二日、江戸南部家本邸（現、千代田区日比谷公園）に、南部藩の江戸留守居役を勤めた加島英邦と、久留米藩士今井九一郎の次女静の三女として生まれた幸子は、はやくに父を病で亡くし、母の手で育てられた。一八六五（慶應元）年、江戸の情勢が不穏となったため盛岡へと帰国、八月より南部家御奥に、翌年二月より小姓役を勤める。維新後の一八七四〔明治七〕年に一家で上京、弟英郎が朝日新聞社の校正係となり、幸子は針仕事の内職で家計を支えた。一八七七〔明治一〇〕年五月一二日、新渡戸稲造の養父太田時敏の媒酌により旧薩摩藩士で大蔵官僚の有島武と結婚。翌年の三月四日に長男を出産し、以後五男二女をもうけた。そう、この有島幸子こそ、有島武郎・生馬・里見淳三兄弟の母親である。^{〔1〕}ただし、本稿の論旨と有島三兄弟の文学的・美術的業績は一切関与しない。

一八八七〔明治二〇〕年頃、当時、横浜税関長であった有島武

にフランス語を教えていた或る人物が、夫妻に異国の小説を語って聴かせた。その話をいたく気に入った幸子は翻訳原稿を作成し、蟲貞の嘶家に自作の材料によかろうと貸し与えたという。その時の借覧の礼状が残されている。

御書拝見仕候此程は御暑さきびしく候得共益々御機嫌よく居らせられ御目出度ぞんじ上参らせ候かねて御はなしの時よりたのしみ居候処へ御いそがしき御中を御心にかけてられ細々と御した、め被下御真実之段有がたく山々御礼申上候末ながら奥方様へよしなに御鶴声被下度候ちかきうち御礼かたぐ、参上拝顔の上万々申上候早々かしこ

七月二十二日

有 島 様

三遊亭 円 朝

蟲貞の嘶家とは、手紙の署名にある通り三遊亭円朝である。その後、円朝からはなんの音沙汰もなく、お蔵入りになったのだろ

うかと残念がっていたところ、一八九五〔明治二八〕年に「先年のお話しをやうやうこしらへた」という一筆を添えて、単行本が贈られてきたという。それが『名人長二』²⁾であった。つまり、円朝は幸子から預かった原稿を座右に置きつつ、この斬を創作したのである。

では、幸子が翻訳したものと小説とは何だったのだろうか。饗庭篁村が「近ごろは惨絶悽絶など、誉め立て陰気の悪事を持ち廻る小説が流行の中なれば、此等の筋は定めて世好に適ふならん。如何やら種は西洋小説らしきものなり」との見解を示すごとく、

『名人長二』が海外小説の、もしくはそれを模した小説の翻案であると気づいていた聴衆は少なかつたようだ。けれども、それが誰の、何という作品であるか承知していた観客はほとんどいなかったであろう。その謎を真つ先に解き明かしたのは、日本のアナトール・フランス³⁾馬場孤蝶であった。一九一五〔大正四〕年一〇月初旬、知人宅で『講談雑誌』第一巻第二号（一九一五年五月号）に掲載された初代三遊亭円右講演・今村次郎速記の「名人長二」を拾い読みしていた孤蝶は、この斬がギ・ド・モーパッサン「親殺し」(Un Parricide)の翻案であると、すぐに当たりをつけたという。明治三〇年代にモーパッサンの「小説」(Le Roman)を日本で最初に訳し、「脂肪の塊」をはじめ、モーパッサン作品の翻訳を数多く手がけた孤蝶なればこそ、一読しただけで『名人長二』の種本が「親殺し」であると感知しえたのである。だがいかに孤蝶といえども、フランス語の読めない円朝に誰が「親殺し」を教えたのかまでは、なかなか掴めなかつたようだ。ところが、その答は思いがけない不思議な巡りあわせによつて、

孤蝶のもとへとたらされる。

或る夜、与謝野寛君のところへ、小宴が開かれた。それは来遊中の米国の某女流文学者から、晶子君が籠花を貰つたので、親しい連中を招いたのであつた。客は藤島氏、梅原氏、有島生馬氏御夫婦、平野萬里氏御夫婦、及び生田長江氏と僕とであつた。

その席で『名人長次』の翻案であることの話が出た。僕は日本に於ける出所が福地氏であるといふことに就いての疑を述べた。

すると、向こふ側に居た有島君が『あれは私どもが横浜に居た時分に、或る仏蘭西語の能きる人が来て、あの話をしたので、それは面白い、円朝に教へてやれといふので原稿を作つて、円朝のところへやつたのです。探せばその時の原稿が家にあるかも知れません。あの話を家へ来てしたのは、多分鶴田といふ人だと思ひます』と云つた。で、それは大凡明治二十二年頃のことなのかときくと、大凡、その頃のことだと思ふといふのであつた。

最早これで『名人長次』翻案の径路は全く分つて了つた。⁴⁾

あまりの偶然に、作り話かとも勘繰りたくなるが、このエピソードが孤蝶による虚構であるか否かの穿鑿はさておき、モーパッサンの「親殺し」を有島幸子が翻訳し、その原稿を参考にして、本所割下水に住んでいた名人気質の指物師で円朝とも親交のあつた実在の長二をモデルに、ふたつの話を緋交せにして拵えられ

たのが、『名人長二』だったのである。

このような経緯もあってか、これまで『名人長二』については、その多くが比較文学や比較文化といった視点から、円朝がモーパッサンをどのように受容したのか、あるいはできなかったのかを物語内容にそって掬い取ろうとしてきた。⁵⁵「人情から出発し人情におわる人情噺の、その途中の波瀾にモーパッサン風の『謎』と『謎とき』が採用され」、「親殺し」は『名人長二』のなかに巧みに溶かし込まれていると分析される一方、モーパッサンが描く近代的な人間の心理や近代的思考の型、社会正義や人道問題などには理解が及ばず、その理由がフランスと日本との国情、社会制度、個人意識の相違、そしてなによりもモーパッサンと円朝との、小説と人情噺との差に求められてきたのである。だが、ともに独自の方法論、なかでも語り／話しについては確乎とした技法を有するモーパッサンと円朝であるにもかかわらず、これまでそのような視座から両作が比較検討されることはなかった。モーパッサン、有島幸子の語りや三遊亭円朝の話しの様相に注視しつつ、あらためて各々の作品を眺めてみよう。

1、モーパッサン「親殺し」

一八五〇年八月五日、イギリス海峡に臨むフランス北西部のノルマンディー地方に生をうけたギ・ド・モーパッサンは、風光明媚なこの土地で、自然と戯れ、周囲の農漁民と親しみながら少年時代を過ごした。一八七〇年、普仏戦争の勃発とともに出征、終結後はパリに出て、八二年に辞職するまで役所勤めで糊口を凌ぎ、

そのかたわら、文学的教養のあつた母や、その兄アルフレッド・ル・ポワットヴァンの親友で師と仰いだギュスターヴ・フロベールに自作の詩や小説を見せ、助言を求めた。一八八〇年、普仏戦争を題材とする極めて挑戦的な小説集『メダンの夕べ』に発表した一編「脂肪の塊」が絶賛を浴び、文名が一挙に高まる。それ以降は、旺盛な文筆活動へと入ってゆき、九三年に短い生涯を終えるまでのわずか十数年のうちに『女の一生』『ペラミ』など六編の長篇小説、二六〇編あまりの中・短篇小説、紀行文、数多くの時事評論文を書いた。田山花袋や国木田独歩といった自然主義の作家を中心に、日本近代文学への影響もはかりしれない。その作品世界は、フロベールの薫陶を受けた明晰な文体と簡潔な客観描写によって、近代短篇小説を完成させたとも評される。

「親殺し」もまた、「客観性（なんとといういやなことばだろう！）の賛成者は、これに反し、人生に起こる事がらの正確な表現を与えんと欲し、複雑な説明や、動機についての論究は、すべて慎重にこれを避け、われわれの眼前に、人物と事件を通過させるだけにとどめる」と提唱された小説作法が隔々にまで浸透した小篇である。語り手が姿をまったく消してしまうというわけではないが、その個性やそれを外部へと表出する声は極端に稀薄化され、目の前の事実をただ淡々と述べているにすぎない。

弁護士は狂気の沙汰だとして弁護した。この不可思議な犯罪を、ほかにどう説明のしようがある？⁵⁸

冒頭の一文によって、読者はいきなり裁判の真っ只中へと引き

こまれる。なぜ弁護士なのか、なぜ裁判所なのかという読者の疑問に答えるべく、男女二人の死体が見つかったこと、ジョルジュ・ルイなる若い指物師が自首したこと、彼は私生児らしく、共和主義とニヒリズムを信奉していることなどが「らしい」「だこのこと」を文末にともない、語り手の主観的な叙述を交えず、無感情に描出されてゆく。審理に対する陪審員や傍聴人の反応も「なるほど尤もだというどよめきがひろがった」と、「説明、注釈、お話しの要素を出来る限り削除して、出来事を剥き出しに描き、直接的に表示」される。原因と結果の規則的かつ均質な連鎖を可能にする単純過去を多用する文体もまた、簡潔そのものだ。ジョルジュや聴衆の心中が、語り手によって代弁されることはないのである。

「どうして二人を殺したんだ？」との質問にも、「殺したかったから、殺したんです」としか答えず、事件の核心についてはなにも喋りたがらないジョルジュ。それゆえ、なんの動機もなく人を殺めるとは「狂気沙汰」以外のなものでもなく、「諸君、処罰しなければならぬのは彼ではなくて、それはむしろコミュニケーションであります」という弁護士の主張に検察当局や陪審員もあえて異を挟まない。裁判長が「被告人は、被告人の弁護について、何もつけ加えることはないかね」という型通りの質問をし、弁護士側の勝訴で結審するかに思われたその矢先、精神病の所為と決めつけられたのを不服としたジョルジュが、大法廷の隅々にまで響きわたる声で「すべて白状します」と、突如真相を喋りはじめる。二人がジョルジュの両親であったこと、不義の子として捨てられた自分こそ犠牲者であること、殺害は正当な権利としての復讐で

あったことなどが、ジョルジュの一人語りで明かされてゆく。もはや語り手の出る幕はない。ジョルジュの独壇場である。たとえ親であったとしても、個人の権利が踏みにじられたのだとすれば、殺人をも正当化できるのではないかと聴衆に訴えかけるジョルジュも、「私はつい最近まで、彼等を受するつもりでい」たのだという。にもかかわらず殺害に至ったのは、結婚費用にと多額の金を差し出そうとした女に「あなたは私のお母さんでしょう？」と訊ねたところ、二人から「お前は狂人だよ！」と罵られ、「全身的な激昂、正義と剛直と名誉と裏切られた愛情からくる激昂が持ち上」ったからだと弁明する。

その時、女の方が、私の髭をかきむしりながら叫びました。『助けておくれ！ 人殺しだ！』私は女まで殺してしまつたようです。私には、その時自分のしたことが、さっぱり分かりません。

私は二人が地面に倒れているのを見ると、あとさきの考えもなく、セーヌ河に投げ込んでしまいました。

以上のとおりです。どうぞ私をお裁き下さい」

無意識のうちに殺人を犯し、前後不覚のまま死体をセーヌ河に投げ込んでしまつたと告白するジョルジュ。ロラン・バルトは「モーパーッサンの不安は罪悪感が形而上的プロセスを経て生み出したものではまかつたなく、原初的、本質的状态であり、それゆえ完全に客観的¹⁰⁾である」と指摘するが、ここでは「不安」を「殺意」と言い換えた方がよいかもしれない。また、その客観性は小説内

容だけでなく、小説表現によっても担保されているというべきだろう。ジョルジュがすべてを話し終えたその後、語り手は読者にひとつの問いを投げかけて、この小話を結んでいる。

被告はふたたび着席した。この自白の結果、事件は次回の公判に廻されることになった。公判はまもなく再開されるだろう。もしわれわれが裁判官だったら、この親殺しを、いつたいどう裁いたらいいだろうか。

「もしわれわれが」と語り手が顕在化しているものの、たとえば「われわれ」と名乗ったとしても語り手の「私」性は「着席した」や「廻されることになった」と謙虚なほど抑制されており、さらに語り手はみずからの了見で安易に幕を下ろそうとはせず、結論を留保し、読者へとその判断をゆだねている。まさに「モーパッサンの考える物語は、(もちろん彼だけに限らないが、彼の名前が便利である) いわば、作つたあととは、そつぽを向いて読者にすつかり委せておくといったもの」^①なのだ。語り手の個性や感情、それを外部へと表出する声は可能ながきり消去され、対象とする事物やテーマが客観性をもつて前景化される。「親殺し」という短篇小説はこのような方法によって構築されているのである。

2、有島幸子訳「親殺しの話」

一八八二年『ル・ゴローワ』紙に発表された当初、モーパッサ

ンの原作は「人殺し」(L'Assassin)という題名であったが、一八八四年八月一九日付けの『ジル・ブラス』紙へ再録される際に、「親殺し」(Un Parricide)と改題された。「有島君の母堂は、親殺しの話は当時の仏蘭西の新聞に続き物で出て居たものだ」と云つて居らるゝといふ生馬君の話」から推し測れば、有島幸子が翻訳原稿を作成したのは一八八四(明治一七)年以降、また先に挙げた礼状の封書には「月岡町有島様御礼状」、その下に「本所南二葉町廿三番地 三遊亭円朝」とあり、円朝が住みなれた本所南二葉町の家屋を売却して神田佐久間町に移転する一八八七(明治二〇)年以前ということになる。「麗文健筆鬚眉丈夫をして一見愧死せしむるの妙あり」^②、「又頗る達筆にして筆勢非凡舞龍躍虎の状あり」^③と賛美された幸子だけあって、その原稿は「極めて美しい筆跡」^④であった。

モーパッサンの本邦初訳は一八九八(明治三一)年二月五日、田山花袋による「二兵卒」(Pettis Soldats)であるという。ただし未発表で、公刊されたものとしてはその翌月に『国民之友』に掲載された国木田独歩訳「糸屑」(La Ficelle)がはやい^⑤。「親殺し」の初訳は一九一〇(明治四三)年、『新潮』九月号の馬場孤蝶訳を待たねばならず、幸子の先見性にはまったく驚かされる。だが目を瞑るべきは、先見性ではなく、その正確な訳文である。モーパッサンが採用した没個性的な語り手を、幸子は見事に日本語へと移し替えている。

此処は名に負ふ仏蘭西の国、シヤテウに近き、さる河辺なるよし蘆のいと生ひ茂りたるなかに、ある朝、男女のかたみ

に腕を抱きあひたる死骸あるを見出して、公にも訴へ、又如何なる人の成れの果てや、いとあさましき有様よと、よりつどひ語り合ひしに、この人人は、此の頃、この国にもいとときめきて、はやりを競ふ人人の中にも其名を知られ、家亦富める夫婦にして、年はやや老ひたり。されどもやうやう去年の夏頃婚禮せし人人にて、女の方は三とせほどやもめにて暮しし人なりといふ。

モーパーッサンが読者をいきなり小説の真つ只中へと引きずり込むのとは対照的に、幸子は「此処は名に負ふ仏蘭西の国」と舞台設定の描写からはじめ、読者を少しずつ小説世界へと誘う。だがそのような相違はあれど、「親殺しの話」においても「親殺し」と同様に語り手が小説の内部世界に介入することや、作中人物への好悪を開陳することはない。「無惨にも河中へ蹴落されたるものならんとおもはれたり」「そもこの人は、いとけなき頃田舎の里親に預けられて、その後両親に見捨てられたるものなり」となどと、地の文は作中人物の推定や伝聞で埋められ、語り手がみずからの声を響かせる余地は残されていない。たしかに「成る程右の如き性質なれば、ふと心狂ひて、このやうなるまがつみを作りたるといふの外には、説き明かしは無かるべし」と、語り手の思惟なのか、作中人物の間接話法的表現なのか判断としない箇所はあるもの、おおむね原文に忠実に、語り手の機能は小説世界の客観的な提示に限定されている。

ただし、見事な訳文を成した幸子をもつてしても移しえなかつたのが、結末の一文である。

かく云ひ終りて其席に著けり。右申立てに依り再び日を改めて此の裁きあるべしと、この日の訊問は果てにけり。され此の親殺しの判決は如何に取扱わるべきやと、人人皆ひそかに云ひあえり。

結末において問題を提起し、その問いの射程が小説世界の外部にまで達している「親殺し」とは裏腹に「親殺しの話」では「されこれの親殺しの判決は如何に取扱わるべきやと、人人皆ひそかに云ひあえり」と、小説世界の内部で結着がつけられている。孤蝶が「我々が若し陪審官に選ばれたら、此親殺事件を何う裁判したものだらうか」と訳していることを思えば、この箇所は幸子訳の瑕瑾だといわねばならない。とはいえ、幸子の訳文は誤訳も目立たず、原作の特徴を正確に伝えようとする意思によって、非人称性という共通基盤をもつフランス語を、過剰な人称性を属性とすする日本語へと、さらに「説明、注釈、お話しの要素を出来る限り削除して、出来事を剥き出しに描き、直接的に表示する」と評されるモーパーッサンの小説作法をも、じつに巧みに翻訳しているのである。

3、三遊亭円朝『名人長二』

マクラに振られた円朝の言葉を信じるなら、「名人長二」の成立は一八九二（明治二五）年頃である。

人力車から落されて少々怪我を致し、打撲で困みますから、或人の教示で相州足柄下郡の湯河原温泉へ湯治へ参り、温泉宿伊藤周造方に逗留中、図らず長二の身の上に係る委い事を聞出しまして、此お話しが成功したのでございます。是が真に怪我の功名と申すものと存じます。

大阪浪花座での興行から戻った円朝は、京橋で人力車から真つ逆さまに落ち、療養のため湯河原温泉へと出かけ、しばらく滞在した。しかしながら「図らず長二の身の上に係る委い事を聞出し」というのは、実話を騙った円朝一流の作話法であり、「是は享和二年に十歳で指物師清兵衛の弟子となつて、文政の初め廿八歳の頃より名人の名を得ました、長二郎と申す指物師の伝記」という紹介も含めて、聴き手に臨場感を与えるための手法にほかならない。とはいえ「無事に十七日（跡月）帰宅の後京ばしにて腕車よりさかさまに落され怪我致、しかし命にはさわりなし、まだ薬を附て居ります」といった弟子三遊亭円馬宛の書簡からも明らかのように、成立の年代については、湯河原温泉での湯治からそれほど隔たらないだろう。

この時期、円朝はすでに寄席から引退していた。一八九一（明治二四）年三月二五日の『東京朝日新聞』には、「円朝寄席へ出ず 三遊亭円朝は大いに時事にでも感じたのか以来府下の寄席へは出勤せぬこと、し専ら弟子にのみ譲るとの事」という記事が載る。寄席退隠の具体的な理由については報じていないが、この辺りの経緯をもっともよく伝える「円朝遺聞」によれば、席亭の横暴な寄席経営に業を煮やした円朝が独立を画策し、三遊派の結

束を試みたものの席亭たちの切り崩しにあい、ついに計画は潰え、やむなく身を引いたという。だからこそ『名人長二』は「自ら筆を探りて平易なる言文一致体に著述し」とと、土子笑面が序で述べるように、円朝作品としては例外的に速記者による口演の速記でなく、円朝自身の筆記によって文字言語化されねばならなかったのである。円朝の置かれたこのような状況ゆえに、『名人長二』はこれまでも「初演の年代は判然としないが、少なくとも明治二八年の春までには数回語られ好評だった」、「明治二十七年から二十八年にかけて高座で語った」と言及される一方、それらの説は「どういう資料によっているか不明であるが、恐らく何かの間違いである」と反駁されてきた。しかし、孤蝶が目にした『講談雑誌』の「名人長二」にある「之は師匠が寄席では余り演りません、御座敷で許り演て居りました御噺で、存生中私に、円右お前に之を譲るから演なさいと、差向で叮嚀に教へて呉ました」という円右の証言を勘案するなら、お座敷で披露し、かたちを整え、みずから書き記したというのが本当だろう。江見水蔭によれば、「これは他人の速記ではなく、円朝自身で執筆したもので、字体など実に綺麗であつた」という。

したがって『名人長二』には、ほかの噺にはない筆記ゆえの痕跡が散見される。たとえばそれは、同工異曲であっても口演速記としていまに伝わる『名人競』と対比してみれば一目瞭然であるう。

四ツ谷通りから新宿へ係り、五宿へ出ますと、五宿に橋本と云ふ只今以て家が残つて居ます。其処へ行つて皆泊りました。

此五宿と申すのは石原村に上下、布田も上下が有り、外に国龍と云ふ宿が有て五ツに成ますから五宿と申ます。

湯河原の温泉は、相州足柄下郡宮上村と申す所にございまして、当今は土肥次郎実平の出た所といふので土肥村と改まりまして、城堀村にある実平の城山は、真鶴港から上陸して、吉浜を四五丁参ると向ふに見えます。吉浜から宮上村まで此間は爪先上りの路で一里四丁程です。温泉宿は湯屋（加藤定吉）藤屋（加藤文右衛門）藤田屋（加藤林平）上野屋（渡辺定吉）伊豆屋（八亀藤吉）などで、当今は伊藤周造に天野某などいふ立派な宿も出来まして、何れも繁昌いたしますが、文政の頃は藤屋が盛んでしたから、長二と兼松は此藤屋へ宿を取ました。

さがが『名人競』で、あとが『名人長二』である。もともと円朝には人物の容姿や舞台の設定をこと細かに描写する癖があり、文章の構成自体にさほど相違はないのだが、『名人長二』における宿場の様子の微に入り細を穿った説明、なかでも温泉宿の主人の名を括弧のなかに書き添えているのは、書記言語だからこそ可能であった優位性にほかならない。だがここで注目したいのは、筆記という普段とは異なる方法によって文字テクスト化されたにもかかわらず、確乎として決して損なわれることのなかった円朝の口演の特質である。「彼は〈語つて〉いるけれど、語られる物が、いかにもじかに、知覚に訴えるので、彼が利用している物語の仕掛け自体は、目にとまらず、物語がおのずと語られていく

ように見えるのだ²⁶」と評されるモーパッサン「親殺し」の語り技法と、そのかなり正確な翻訳である有島幸子「親殺しの話」を座右に置きつつ翻案された『名人長二』における円朝の話法、両者を比較検討してみよう。

落語という芸能における話法の変遷や、円朝の話法と「近代」落語の話法の懸隔などについては以前にも論じたが、馬場孤蝶が「如何にも落着いた、飾り気を嫌った、描写式——会話を余り用いないという意味——の咄口であった²⁷」と記憶する円朝の話法は、同じく孤蝶に「大抵対話ばかりで運んで、地の所をなるべく少くして、やって行く。今の小さんの話を聞かれる人は、其所に一番善く気が附かれるだろう」と評された三代目柳家小さんの話法と好対照をなす。「地の所が対話の間に随分多く入った」円朝の話法に対して、小さんの話法は「確に新味を帯びて²⁸」いたのである。「落語とは、——と考えていった時、問題はその特殊な話術の性質と手法にある」と喝破した桂米朝によれば、「対話だけで噺を運ぶ……地の文が少ないほど、いや、なければならぬにこしたことはない……という演出態度を佳しとする姿勢²⁹」こそ「近代」落語のそれであり、場面の移動や情景描写、心理描写でさえも登場人物の科白で表現し、叙述である地の文を可能なかぎり刈り込み、会話から叙述の地に移ることを「地に返る」「地に戻る」といつて極端に嫌うという。話者の個性を抑制することで登場人物が前景化され、彼らの対話が、対話という関係において発言者の個性を造型してゆく、つまり、米朝が主張する「演者が消滅してしまうという演法」に対して、滑稽な世界を描き、「オチ」をつけなくてはならないという、落とし噺としての制約から自由で

あつたからこそ、長大な物語、複雑な人間関係、深遠な人間性を追求できた円朝の癖には、それゆえに、みずからの位相を明確にし、登場人物の作品世界を統御するための話者が必要とされたのである。

このような話法が『名人長二』でも採用されている。モーパッサンの語り手に比べて「扱此長二郎と申す指物師は無学文盲の職人ではありますが、仕事にかけては当時無類と誉められ、江戸町々の豪商はいふまでもなく、大名方の愛顧を蒙つた程の名人で」と、機能を大幅に拡張された話者によつて癖が運ばれ、「真面目な男で」、「孝心の深い」、「万事並の職人とは志操が異つて居ります」と、親孝行や篤志家といった長二の人物像が、さまざまな挿話を交えながら話者によつて形作られてゆく。

ふとした偶然から、静養にきた湯河原の温泉宿でみずからの出生の秘密を知つた長二が、江戸に戻つて実親と邂逅、二人を殺害するといふこの辺りの筋立ては、ほとんど「親殺し」そのままといつてよい。奉行に殺害の動機を訊ねられ、「へい、只殺しましたので」と答弁したところ、「只殺したでは相済まんぞ、殺した仔細を申せ」と質されるも、「其事を申しますと両親の恥になりますから、何と仰やつても申上げる事は出来ません」と真相については黙秘をきめこむのも、ジョルジュと瓜二つである。だが、原作にあつてはジョルジュの口から直接明かされる、出会い―憤怒―殺害と続く、その刹那の心模様も、『名人長二』においては「扱は此婦が吾を生んだ実の母に相違あるまいと思ひました」、「現在実子と知りながら旧悪を秘して、人を懐けやうとする心底は面白くない」、「長二はお柳も吾を殺す気か、能くも揃つた非道

な奴等だ」と、話者によつて描出される。加えて、長二と幸兵衛お柳夫婦との大立ち回りも、「幸兵衛夫婦の前へ一人の男が突立ちました。是は申さないでも長二といふことは、お察しでございませう」といふ話者の言葉で幕が開き、「何に申すも急所の深手、諸行無常と告渡る浅草寺の鐘の音を冥府へ苞に敢なくも、其ま、息は絶えにけりと、劇場なれば義太夫にとつて語る所です」と、話者のちよほ語りによつて幕が閉じられるのである。

師匠に累が及ぶのを恐れた長二は、清兵衛の作つた桑の書棚を才植で打ち毀し、縁切の書付を置いて出て行つてしまふ。日付を霜月から十月へとひと月ずらし、事件の前に縁を切つていたかのように細工することで、師匠に迷惑をかけまいとする長二だからこそ、清兵衛も「彼奴が親孝心の次第から平常の心がけと行為の善い所を委しく書面に認めて、お慈悲願をしなければ彼奴の厚志に対して済まない」と、力にならうとするのだが、その清兵衛の心情もやはり地の文で表出されている。話者が冒頭から繰り返し造型してきた名人、親孝行、篤志家という長二の人物像が、ここで実を結ぶ。南町奉行の筒井和泉守も板倉屋の主人や林大学頭から「長二の身持の善き事と技倆の非凡なることを」聞いており、「其気性の潔白なるに益々感服」し、「斯様な名人を殺すは惜しいもの、何とかして助命させたい」と願うのである。聴衆（読者）の思いもまた同じであろう。けれども、親殺しを免罪する妙案がどうしても思い浮かばない。筒井和泉守は、よんどころなく筆頭老中の土井大炊頭に助言を求め、評議の上、時の將軍徳川家斉へと長二の罪科の裁許を申し出る。

成ほど半右衛門妻柳なる者は、長二郎の実母故親殺しの罪科に宛行ふべきものなるが、柳は姦夫幸兵衛と謀り、玄石を頼んで半右衛門を殺した所より見れば、長二郎の為めには幸兵衛同様親の仇に相違なし、然るに実母だからといって復讐の取扱が出来ぬといふは如何にも不条理の様に思はれ、裁断に困むとの御意にて、直に御儒者林大学頭様を思召しに成り

將軍家斉の胸中までもが「仇に相違なし」「不条理の様に思はれ」と話者によって代弁されるのである。

このように語り手／話者の機能が大きく異なる「親殺し」と『名人長二』において、もつとも対比的なのが終止符の打ち方であろう。斎藤広信は前者を「開かれた結末」、後者を「閉じていく結末」と措定し、「私生児の親殺しをめぐって、それをどのように裁いたらよいか」という問題が読者に向かって開かれた構造になっている。原作と、「人情」という主題に沿って結末に向かって収斂していく構造」で、大岡裁きによって万事めでたしめでたしと、「結末が閉じられ」ている円朝の嘶の差異を指摘してみせた。だが、「もしわれわれが裁判官だったら、この親殺しを、いったいどう裁いたらいいだろうか」という「親殺し」の幕切れも、「長二郎の半之助は根岸へ隠居して、弘化二巳年の九月二日に五十三歳で死去致しました。墓は孝徳院長誉義秀居士と題して、谷中の天龍寺に残つてございます」という『名人長二』の大団円も、ともにその語り／話しの技法によって最大限の効果が生まれていることを見逃してはならない。語り手の個性を徹底的に抑制し、対象やテーマを客観的に提示するモーパッサンの方法なれば

こそ「開かれた結末」が可能だったのであり、もしかりに、みずからの思いを開陳し、登場人物の思いを代弁するような語り手であったならば、結末の問題提起においても、読者は誘導されたと感じ、鼻白むことであろう。反対に、話者が長二をはじめ、清兵衛や筒井和泉守、將軍家斉の心中にまで介入し、大団円へと巧妙に誘う円朝の方法なればこそ「閉じてゆく結末」が有効だったのであり、もしかりに個性やそれを外部へと表出する声が極端に稀薄化され、目の前の事実をただ淡々と述べているだけの話者であれば、聴衆は登場人物への感情移入を許されず、めでたしめでたしの結末に納得できなかったであろう。

思えば円朝のこのような話法は、『ピエールとジャン』の序に添えられた「小説」において、モーパッサンが虚偽的であると論難した小説作法とかなり似通っている。

例外的な、人をひきつけるような事件をひきだすために、不変にして残忍、かつ不愉快な真実を變形させる小説家は、ほんとうらしきなどということにはことさら氣を使わず、思いのままに事件を操作して、読者をたのませたり、感動させたり、しんみりさせたりするために、準備や配置をしなければならぬ。かかる小説のプランは、たくみに大詰めの効果に向かって、せいとんされ、高まっていく。大詰めは主要な決定的な事件で、はじめに喚起されたあらゆる好奇心をみたし、興味をそこでびたりと止め、読者として、自分のいちばん愛着する人物が必ずどうなるか、もう知ろうとしないくらい、完全に物語の終止符を打つのである。

円朝は、ほかの噺と同様に『名人長二』においても「思いのままに事件を操作して、読者をたのしませたり、感動させたり、しみみりさせたりするために」、周到に「準備や配置」を行つていく。「せいとんされ、高まつていく」その噺は、「大詰め」において「完全に物語の終止符を打つのである」。モーパッサンも、自分の作品がみずからの否定した小説作法と相似の方法によつて翻案されるとは夢にも思つていなかっただろう。むろん、円朝のこうした手つきへの批判が皆無というわけではない。

明治の大衆は、このいささか無理な筋はこびにもかかわらず、儒教的トリックに満足したのであろう。「一件落着」の権威主義的トリックに満足したのであろうが、しかし、肝心のところは儒教道徳にあるのではなく、むしろ、人情にあり、人格性にある。その人情、その人格性を救うためのトリックとして、儒教をうべなつたのではないかと思われる。⁽³³⁾

長二を最肩する町奉行の筒井和泉守や御儒者林大学頭、將軍家斉が、五経のひとつ『礼記』第三卷檀弓篇の一節を、政治的に、きわめて長二に都合良く解釈し、その権威性の発動によつて長二を救い、民衆の人情を守つて大団円を迎える円朝の噺は、権力性を補完しているにすぎないと、円朝の権威主義が、それに満足した明治の大衆が批判されているのである。なるほど、その通りなのかもしれない。しかし、円朝が権力のもつ利己主義をさりげなく撃ち、みずからの方法論への自戒とも受けとれるような発言を、

話者に託して残していることも忘れてはならない。

林大学頭様は、先年坂倉屋助七の頼みに依て長二郎が製造致した無類の仏壇に折紙を付けられた時、其文章中に長二郎が技倆の非凡なる事と、同人が親に事へて孝行なる事と、慈善を好む仁者なることを誌した次に、未だ学はずといふと雖も吾は之を学びたりと謂はんとまで長二郎を賞め、彼は未だ学問をした事は無いといふが、其品行と志操は、充分に学問をした者も同様だといふ意味を書かれて、其後人にも其事を吹聴された事でありますから、其親孝行の長二郎が親殺しをしたといつては、先年の折紙が嘘言になつて、御自分までが面目を失はれる事になりますばかりでなく、將軍家の御質問も御道理でございますから、頻りに勘考を致されましたが、

林大学頭が「頻りに勘考」したのは、なによりもまず長二を誉めた「先年の折紙が嘘言になつて」、自分の面目が失われるのを怖れたためなのだ。「ばかりでなく」が示唆するように、將軍家からの質問に答えるのは二の次なのである。円朝は、権威の妄執をさらりと暴いてみせたのだ。実親から疎外されたジュールジュの悲壯をあますところなく描き出し、社会正義や人道、倫理の問題を提起するモーパッサンの筆も、そこまでは及んでいない。物語内容においても、その表現においても客観性を身上とするモーパッサンの方法では、小説世界全体を傍観するような作中人物を設定しないかぎり、裁判官や陪審員、すなわち裁く側の権力性を糾弾するのは困難であらう。みずからの位相を明確にし、登場人

物の作品世界を統御する話者という円朝の確乎とした方法があったからこそ、権威批判および自己批判が可能だったのであり、「親殺し」は「名人長次」として翻案されたのである。

円朝の話法については、より詳細な話者の機能、人物になりきるうえで優れた演技力、地の文と科白、話者と登場人物の棲み分け等々、検討すべき課題は少なくない。また円朝の話芸が落語史にいかにか位置づけられるのか、あるいはそれは円朝に固有の方法であったのかなどの問題についても考察すべきではあるが、紙面の関係上、別稿にゆずることとする。

注

- (1) 有島幸子の履歴については、有島武郎研究会編『有島武郎事典』（勉誠出版、二〇一〇年）を参照。
- (2) 三遊亭円朝作述『指物師名人長治』（博文館、一八九五年）。なお演題については「長二」、「長治」、「長次」が混在する。本稿では『中央新聞』（一八九五年四月二十八日～六月一五日）初出時の「長二」に統一する。
- (3) 饗庭篁村『竹の屋劇評集』（東京堂、一九二七年）。
- (4) 馬場孤蝶『名人長次』になる迄——翻案の径路——（『東京日日新聞』一九一七年七月一六日）。のち『闘牛』（天祐社、一九一九年）、有島生馬編『有島幸子家集』（私家版、一九三五年）所収。
- (5) 畠中敏郎『親殺し』と『名人長次』——モパッサン、円朝、新七』（『Etudes françaises』一九六七年二月）。のち『比較

文学の小道』（畠中敏郎先生論集刊行会、一九七三年）所収。富田仁『フランス小説移入考』（東京書籍、一九八一年）など。

- (6) 多田道太郎『「名人長二」の成立と構造』（小島政二郎、池田弥三郎、尾崎秀樹監修『三遊亭円朝全集 第六卷』、角川書店、一九七五年）。のち『多田道太郎著作集 第一卷』（筑摩書房、一九九四年）所収。

- (7) 『ジュールとジャン』序「小説」の引用は、『モパッサン全集 第一卷』（新庄嘉章訳、春陽堂、一九六五年）に拠る。

- (8) 「親殺し」の引用は、『モパッサン全集 第九卷』（小林龍雄訳、春陽堂、一九五六年）に拠る。

- (9) André Vial, *Guy de Maupassant et l'Art du Roman*, Nizet, 1954

- (10) ロラン・バルト「モパッサンと不幸の物理学」（大野多加志訳『演劇のエクリチュール 1965-1967』、みすず書房、二〇〇五年）。

- (11) ラボック『小説の技術』（佐伯彰一訳、ダヴィッド社、一九五七年）。

- (12) 注（4）に同じ。

- (13) 鈴木光次郎編『明治閨秀美譚』（東京堂書房、一八九二年）。

- (14) 須藤愛司『名士名家の夫人』（大学館、一九〇二年）。

- (15) 注（4）に同じ。

- (16) モパッサンの日本輸入については、大西忠雄「モパッサンと日本近代文学」（吉田精一編『日本近代文学の比較文

学的研究、清水弘文堂、一九七一年）や、松田穰「モーパッサン」（福田光治、劍持武彦、小玉晃一編『欧米作家と日本近代文学 第二巻 フランス篇』、教育出版センター、一九七四年）などを参照。

(17) 有島幸子訳「親殺しの話」の引用は、有島生馬編『有島幸子家集』（私家版、一九三五年）に拠る。

(18) 『新潮』（一九一〇年九月）。のち馬場孤蝶訳『モオパッサン傑作集』（如山堂書店、一九二四年）所収。

(19) 注（9）に同じ。

(20) 鈴木古鶴『円朝遺聞』（鈴木行三編『円朝全集 卷十三』春陽堂、一九二八年）。

(21) 伊狩章「日本文学とフランス文学（2）——モーパッサンの輸入とその媒介者——」（日本比較文学会編『比較文学——日本文学を中心として——』、矢島書房、一九五三年）。

(22) 大西忠雄「モーパッサンとその日本への影響」（河内清編『自然主義文学』、勁草書房、一九六二年）。

(23) 小川茂久『名人長二』と『親殺し』（『文芸研究』一九六九年一〇月）。

(24) 江見水蔭『自己中心明治文壇史』（博文館、一九二七年）。

(25) 注（11）に同じ。

(26) 拙論「素嘶との出会い——三遊亭円朝『真景累ヶ淵』論——」（『立教日本文学』第一〇三号、二〇〇九年二月）、『円朝の現在』（『大衆文化』第五号、二〇一一年四月）。

(27) 馬場孤蝶「文化の変遷と寄席の今昔」（『新文学』一九二五年四月）。のち『明治の東京』（中央公論社、一九四二年）所

収。

(28) 馬場孤蝶「落語」（初出不明）。のち『明治の東京』（中央公論社、一九四二年）所収。

(29) 「新味」の宿命として批判されることも少なくなかったようだ。一九〇五年六月一日、日本橋常盤木俱樂部で催された第四回落語研究会で演じた「猫久」について、岡村柿紅は「扱て此日の出来栄に就いて言へば、猫久の女房の刀を夫に渡す時に『確乎しなくつちやア不可よ、沈着て、水でも飲んで……』など、いふのは甚だ面白くない。猫久夫婦の件は飽く迄も筋を通す丈に地で話し、其人品を聴く者をして想像せしめた方が趣が深い」と注文をつけている。

(30) 桂米朝「落語の位置」（『帝塚山演劇学』一九六九年五月）。のち『桂米朝集 第一巻 上方落語1』（岩波書店、二〇〇四年）所収。

(31) 斎藤広信「モーパッサン『親殺し』と円朝『名人長二』——変容の分析とその視点——」（川口久雄編『古典の変容と新生』、明治書院、一九八四年）。

(32) 注（7）に同じ。

(33) 注（6）に同じ。

*『名人長二』の引用は、三遊亭円朝作述『指物師名人長治』（博文館、一八九五年）に、『名人競』の引用は、三遊亭円朝口演・酒井昇造速記『錦の舞衣』（春陽堂、一八九三年）に、円朝書簡の引用は、鈴木行三編『円朝全集 卷十三』（春陽堂、一九二八年）に拠る。ただし、読み易さを考慮して句読点を補い、

漢字は新字体に、ルビは適宜省略した。

【付記】

なお本稿は、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」(A09351900)による研究成果の一部である。

(みやのぶあき 早稲田大学演劇博物館研究助手／本学兼任講師)